北海道医歌人会詠草

湖国をゆく

函館　水関（みずせき）　清（きよし）

幾重にも積み重なりし歴史あり　早乙女らの踏む　臾弥呼の大地
晩婚のケリの巣残す　巨椋池（おぐらいけ）　早苗に囲まれゆっくり子育て
朝露は無数の鏡　どの粒も　たった一つの空を映せり
少しずつ　己が重みをふくらみに変へて　葉の露滴り落ちぬ
ゆっくりと開く米原駅弁は　「湖北のおはなし」　五の目のサイコロ

採用

士別　竹内（たけうち）　幹夫（みきお）

履歴書と言ふ名の人の生（ふ）読み解きて　来る未来を我紡げるや
くちびるを出づる未来を語る声　胸に刺さりて赤き血の見ゆ
それぞれの夢ぶつかりし面接場　気は留まりて胸は騒ぎぬ
「履歴書を紙飛行機にして飛ばしたし」　こころ腑に落つ面接終へて
応ふ人の夢をみながら叶へたし　虚し繰り言神ならぬ身は

道内の、とあるマチにて

滝川　村田（むらた）　英俊（ひでとし）

吹雪く中　灯台の灯のさまに照るテールライトについて行くなり
世間の目により犯罪減りたるもはじかれた人は行き場を失くす
友がきの「がき」の意味知らず「ふるさと」の歌を永年うたいて来たり
駅でみる暗い感じのホームレス物入れ袋をいくつか持てり
何かある！七年振りに訪れた小さな町の本屋は老舗（しにせ）

ツタ

札幌　浜島（はまじま）　泉（いずみ）

丘の道色づきしツタ散り置きつ　緑の頃は気づかず過ぎし
色づきて異なるを見つ　駅前の植え込みモミヂ樹種知るとなる
黄葉（こうよう）の始まりと見つイチヨウの葉　ミゾレたちまち半ばは落ちつ
山肌を紅葉（こうよう）帯と常緑に染め分く　朝の雪消ゆるとき
散りもみじ踏み砕（しだ）かれて雪を染む　溶けて消（け）ぬれば今日のみのもの

春の夢

釧路　児玉（こだま）　昌彦（まさひこ）

リハビリも信心なければ救われぬ　フト歩み止め再び歩む
リハビリの後にうるおす一杯のコカコーラに酔う小さな幸せ
悩み深き青春を脱し安寧の齢にして想う若き肉体
バラバラの愛の記憶を組み合わせ物語り編む遊行（ゆぎょう）期の夢
厚着した小学生のあふれでる校門の前　歓声に満つ

小樽海岸

北広島　古屋雅三知（ふるやまさみち）

銭函の凍てつく海の波の間に浮き沈みするサーファーの影
張碓は駅の跡さえ定かならで訪うものも一人とて無し
夏の浜の海水浴の賑わいも冬の朝里はただ波高し
南小樽　電車降りれば流れ来るメルヘン通りの時告げる音（ね）が
運河沿ひ　そぞろ歩けば偲ばるる商都小樽の面影恋し